

C O R R E N T E

Centro Culturale Italo-Giapponese di Kyoto

RiITALIA (イタリア再発見) ⑥

* Un uomo entra in un caffè... *

国司 航佑

“Un uomo entra in un caffè, splash!” 何の変哲もないように思われるこの一文。読者諸氏は難なく理解できるだろうか。

実はこれ、少し前に友人から教えてもらったバルゼツレッタである(バルゼツレッタというのは、笑いを取ることを目的として披露される、一種の小噺のようなものを指す)。筆者は、上のバルゼツレッタを初めて耳にした際、恥ずかしながら、その意味を理解することができなかつた。後で違う友人に尋ねて答えを教えてもらい、その時には少しにやつきながらなるほどと納得させられたのだが、それと同時にこれほど簡単な言葉遊びがどうして理解できなかったのか、その理由を考えさせられた。そうして一考してみると、これにはどうやら、言語と人間の思考との間にある複雑かつ根本的な問題が関係しているようだということが分かった。今回は、言語と言葉遊びについて、一つのバルゼツレッタを例に挙げてお話したい。

さて、上のバルゼツレッタは、どのような言葉遊びになっているのだろうか。一語、一語取り上げて調べていこう。もちろん、実際のところは、イタリア人であれ日本人であれ、この手の文章を理解しようとする際に、単語レベルにまでに文を分割しつつじっくりと分析することはないだろうが(そんなことをしていたら日が暮れてしまう!)、言葉遊びの仕組みを考えるために、ここでは敢えて分解しつつ検証したい。

文頭の“un uomo”は、冠詞と名詞の組み合わせであり、「ある男」という意味になる。次の

“entra”は、動詞“entrare”の三人称単数の現在形であり、「入る」という意になる。続く“in”と、最後の“un caffè”とは、それぞれ二つの語義を有している。前者は前置詞であり、「～の中で」もしくは「～の中へ」という意味をもち、後者は、冠詞と名詞のセットであり、「一杯のコーヒー」もしくは「ある喫茶店」を意味する。前後関係を考慮に入れつつ文全体を考えると、どうやら、「ある男が喫茶店に入る」という意味になりそうだ。しかし、そうなると、最後の“splash”は何を意味するのかという疑問が残る。“splash”という語は、日伊中辞典には載っていない。日伊辞典に出てこない単語であれば、その辞書的な定義を知らなくても罰は当たらないだろう。だが、音の響きに少し注目するならば、これが英語から輸入された単語であり、また、恐らく水のしぶきと関係する語義をもっているだろうことは容易に推測される。試しにオンラインのイタリア語辞典 Hoepli で調べてみると、「擬音語。ある固い物体が液体中(特に水中)に落下する時に発生する音を再現する」と出てくる。日本語でいうところの、「ばちゃーん」や「ばしゃっ」というような擬音語に当たるといえようか。

さて、これを踏まえて“un uomo entra in un caffè”を振り返ってみよう。そろそろ気付かれた方もいると思うが、この文に登場した“caffè”は、実は「喫茶店」ではなく「コーヒー」を意味していたのである。和訳したところであまり意味がないだろうが、とにもかくにも日本語にしてみるならば「ある男が一杯のコーヒーの中に入って、ばしゃーん」

というような一文が得られる。常識的には、コーヒーの中に人間が入ることなどまず有り得ない。だから、最初からこの文を追っていくと、男が入るのは「喫茶店」の中だと解釈するのが自然である。だが、その後“splash”という擬音語が耳に入った瞬間、男が入ったのが「コーヒー」の中であったとする非常識な解釈こそが実は正しいものだったことが判明するのである。我々の思考は、文法的には可能であっても現実にはありえない意味を無意識に排除する傾向をもつ。こうしたメカニズムをうまく利用しつつ常識を逆手にとった言葉遊びこそが、このバルゼツレッタの肝なのであった。



【人気バンド Elio e le storie tese もこのバルゼツレッタを歌った。

(http://elioelestoriatese.it/dettaglio-prodotto/?product_id=469)

しかし、このバルゼツレッタを、筆者はなぜ理解できなかったのだろうか。初めてそれを聞いた際、単語の意味は、“splash”以外、全て知っていたはずである。また、当の“splash”に関して、その辞書的な定義は把握していなかったものの、これが水に関連する擬音だということ程度は分かっていただろうと思う。これだけの情報があれば、上のジョークの面白みが問題なく分かってよさそうなものである。だが実際は、そうはならなかった。ところで、最初にも述べたように、このバルゼツレッタの仕組みについて筆者が理解に至ったのは、友人に教えてもらったのことであった。実はそのとき、最初間違えて、「“Un uomo entra in un bar, splash!” っていうバルゼツレッタ知っている？」と尋ねていた。例のバルゼツレッタは、“caffè”という単語の多義性を利用したものであったから、

“caffè”を“bar”にしてしまっただけは当然通じるわけではない。しかもつ面をする友人に対し、いや“bar”じゃなくて“caffè”だったつけなど、記憶の断片を適当に組み替えながら筆者が説明すると、友人は「ああ、それならこういうことだ」と言って例の言葉遊びのメカニズムを教えてくれた。筆者は、最初にバルゼツレッタを聞いたとき、その文意のみを理解しようとしてしまっていた故、“caffè”をその類義語である“bar”に無意識のうちに変換してしまっていたのも拘わらず、その過ちに気付かなかったのである。

さて、自ら答えを導き出せなかったことに少しショックを受けた筆者は、自身のイタリア語能力そのものに不安を抱き始めた。そこで、知り合いにこのバルゼツレッタを聞かせてみた。まずイタリア語を母語とする者の場合、半数以上はこのバルゼツレッタを知っていて、知らなかった残りの数名も皆この言葉遊びを瞬時に理解した。唯一、理解しなかったのは、イタリア人とフランス人のハーフの女性であった。一方、外国人のイタリア語学習者については、かなりのレベルでイタリア語を駆使するブラジル人とロシア人、そして様々なレベルの語学能力をもつ日本人数人を対象に実験してみたのだが、大半が説明されるまでそれを理解できず、理解できた極少数の者も多少の時間を要した。

この検証を通して理解されるのは、言語能力に関していうと、それを母語とする話者とそうでない人間との間にある大きな隔たりが存在しているという事実である。そして、それはまさに言葉遊びの理解度によって特に明るみに出る差異なのである。“un uomo entra in un caffè”という一節を聞いたとき、恐らく外国人は、すぐにそれを「ある男が喫茶店に入る」という「意味のまとまり」に還元した上で言葉の響きを忘れてしまうのだが、これに対しイタリア人は、「ある男が喫茶店に入る」シーンを想像しつつも、同時に言葉の残響を脳内に保存するのであろう。文の捉え方におけるこうした差異が、直後に発される“splash”を聞いたときに、すぐ反応できるか、そうでないか、その決め手となるのだと推測される。

我々は、外国語による言説を理解しようとするとき、その全体の意味を理解しようとする。また、外国語を使って自らの意志を伝達しようとする

き、その意味の全体を伝えようと試みる。だから、そこで重要な役目を果たすのは、文脈であり、また理論の整合性でもある。しかし、母語を使う場合には、文脈や論理によって規定される文意に加えて、一つ一つの単語それ自体のもつ「多義性」や「音」が強く意識される。注目すべきは、単語というものが、それぞれに一樣ならざる語義を有しているだけでなく、意味とは必然的な関係をもたない「音」という要素をも包含しているという事実だろう。イタリア人が、“splash”の登場とともに「喫茶店」から「コーヒー」に瞬時に変換することができるのは、彼らが二つの語義を同時に想定しながら話を聞いているからではなく、caffè という「音」を記憶していて、その単語にすぐに立ち戻ることができるからだと考えられる。

母語を使用する際に「音」が大きな役割を果たすということを確認するには、例えば、なにか意味のない言葉を耳にした時を想定してみるとよい。〈ジュウハツサイコウ〉でもなんでもよい。これを一聴させて、繰り返してみたと頼めば、それに答えられない日本人は恐らくいない。一方で、“caltanissetta”と不意に言われてこれを完璧に再現できる日本人は、稀にしかいないだろう。母語のもつ音声システムによって構成される言葉は、その受け手に対して「音」を伝達するのである。ちなみに、〈ジュウハツサイコウ〉は山形県に、“caltanissetta”はシチリアに、それぞれ実在する町の名である。

ところで筆者は、イタリア語で執筆した文章をイタリア人に見てもらおう機会をしばしばもつのだが、そういう時、「響きがよくない」という理由で添削されることがままある。この場合、どうして響きがよいのか、あるいはそうでないのかは、結局のところ筆者にはよく分からないままとなるのが常である。しかし、こうした経験を通して、イタリア語にまつわる次のような事実を確認することができた。それはすなわち、イタリア語を母語とする人間が、イタリア語を話し、聞き、読み、書くときに、「意味」

と「音」とを明確に区別しているわけではないということである。



【フィレンツェにある老舗のcaffè「カフェ・ジッリ」
(12/07/21 wikipedia より)】

一つ一つの単語に固有の「音」、そのそれぞれが有する多様な「語義」、そして文法や文脈によって規定される一つの「文意」。普通、一般常識などが基準に据えられ、これらの間には一定の関係が存在するのだが、言葉遊びは、こうした関係性を意図的に断ち切りつつ再構成することによって成り立っているものである。そして、上に述べた通り、我々は外国語に接する際「一つの意味」を確定することに急いでしまう傾向をもつから、必然的に、言葉遊びの理解を苦手としてしまうのであろう。ただし、言葉遊びは、常にその答えが用意されているからまだ処しやすい。これに対してより厄介なのは、鑑賞者の裁量に解釈を委ねてしまう芸術、すなわち詩である。詩人もまた、「音」と「意味」の間にある常識的な関係を破壊しつつ作品を創造する。そして、享受の仕方が自由であるため、詩は外国人にとっては却って理解しがたいものになってしまう。「詩」についても、同様の切り口から論じてみたいが、それは次回に取っておくことにしよう。

(元当館スタッフ)

イタリア発月刊日本語新聞



イタリア在住日本人と日本人観光客のための情報誌

編集・発行 NIPPON CLUB SNC
Via Torino, 95 - 00184 Roma, Italy
Tel. & Fax : (06) 4743. 212
E-mail : comeva@nipponclub.it
URL : www.nipponclub.it

『素晴らしき自転車レース⑬』

～消されたレーサー～

谷口 和久

●“消されたレーサー”

イタリアの最東北部に位置するフリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州は、大阪でいえば「西中島南方」や「四天王寺前夕陽ヶ丘」などと同じで、あちこちの地名がツギハギにされて、政治的背景の複雑さがその名称にあらわされている。「ヴェネツィア」という名が含まれてはいるものの、みなさんご存知の海上都市ヴェネツィアはヴェネト州にあり、この「フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州」の中にあるわけではないのだ。

この地の領土問題が最終的な決着を見たのは1975年。たかだか40年にもならない時代の話である。19世紀なかばのイタリア統一以来、オーストリア・ハンガリー帝国やユーゴスラビア（いずれも当時）との領土問題に揺れに揺れたこの地は、自転車競技の歴史においても、暗い一幕の舞台となった。

一人の有力な自転車レーサーが、州中央部に位置するペオニス村の路上で、なんと頭がい骨骨折、意識不明の重体で発見され、そのまま意識が戻ることなく亡くなるという事件が起きたのである。

●生い立ちとキャリア

オッタヴィオ・ボットェッキア “Ottavio Bottecchia” は1920年代に活躍したイタリア人レーサー。24年、25年にはツール・ド・フランスを連覇し、イタリア人としては初めてツール総合優勝者リストに名をつらねた。

1894年に貧農の9人兄弟の八男坊として生まれた彼は、日本語で言えば「八郎」に当たる「オッタヴィオ “Ottavio” (otto はイタリア語で“8”の意)」と名付けられた。言い方は悪いが、ぞんざいな名づけなわけで、両親としても、もはやそれほど望んでいなかった子どもでもあったことは明らか

だろう。そんなボットェッキアは、家計を支えるために、学校もろくろく通わず、早々にレンガ職人の道を歩んでいた。



【力走するボットェッキア】

第一次大戦(1914年～18年)に機関銃士兵として従軍したボットェッキアが自転車レーサーとしてデビューしたのは26歳の頃のこと。当時としても遅咲きの方であった。非常に熱心なレーサーであったボットェッキアは、フランスの強豪選手アンリ・ペリシエに見出され、フランスのチーム「オート・モト」に加入。結果的にはフランスチームへの加入が、自身の後々の評価にとってはマイナスとなった。

オート・モト加入後の1923年には、まずジロで5位。続くツールで2位に入る。翌24年にはツール総合優勝を果たした。さらに25年には、同じくツールで、4つのステージを制して、またもや総合優勝。前述したように、イタリア人として初のツール連覇を果たしたのである。

ただ、自国意識の高いイタリア人からしたら、フランスのチームに移ってフランスのレースにばかり注力するボットェッキアは、あまり快く思えない存在であった。

●ファシズムの時代

1920年代は、イタリアにおいてファシズムが台頭しつつある時代であり、国家全体主義を標榜するファシスト党からしてみたら、ボットェッキアのような男は自国に対する忠誠心が少ない人物とみなされてもいたしかたがなかった。さらには、ボットェッキア自身、反ファシズムの社会主義者でもあったのである。

当時、ファシズムはまさに「飛ぶ鳥を落とす勢

い」で、イタリア国内でその地歩を固めつつあった。当初は第一次大戦に従軍した在郷軍人たちの身分保障を目的として立ち上がったファシズムは、反体制、反制度、反政党を標榜するなど、既存体制・既得権益に対する“アンチ・テーゼ”として活動を始め、ときには暴力的な直接行動に走り、その勢力を拡大していった。

この前後のできごとを、年をおって整理してみよう。

- 1914年 第一次世界大戦始まる、ただしイタリアは当初中立の立場をとっていた(枢軸側の独逸と同盟関係にあったため)
- 1915年 イタリア、連合国(英仏等)として参戦
- 1918年 第一次世界大戦終わる
- 1919年 「戦士のファッション(のちのファシスト党)」結成
- 1922年 ムッソリーニ首相任命、のちに国会において全権委任を獲得
- 1925年 ファシズム独裁宣言、国家至上主義宣言
- 1926年 秘密警察の設置

ファシズムがここまで力を得た背景には、当時、イタリア統一から第一次大戦に至るまで、駆け足で民主化・先進国化を進めたことによるひずみが国のあちらこちらにあらわれて、そこかしこでうずまく不平不満の空気が、あたかも部屋の中のかまかいチリがたまりにたまってゴルフボール大のかたまりになるように、ファシズムの誕生と成長を後押ししていった。

政治とスポーツの関係は、いつの時代・いづこの国でも多かれ少なかれみられるものだ。近いところでは、昨年のサッカー日本代表対北朝鮮戦の異様な雰囲気や記憶にあるが、どこの国でもスポーツは「愛国心」の希求に利用される。当然、ファシズムもおおいにその点は承知しており、ある意味、イタリア・ファシズムとドイツ・ナチスがその先駆けとも言えるだろう。兵士を究極とする「従順な、服従する肉体」を生み出す場として、スポーツは大いに推奨された。なにより、ムッソリーニ自身ランニング姿をアピールしたりして、「イタリアでもっともスポーティな男」の称号を得ていた。



【走るムッソリーニ(左から2人目)】

「若々しさ」「力強さ」「男らしさ」が、ファシズム時代の底に流れる通奏低音であり、ボクシングやサッカーなど「マッチョ “maschile”」なスポーツが推奨された。

では、自転車競技はどうだったか。実はこの時代、自転車競技は冷遇されていたのである。派手さがなく、苦行のような自転車競技は、ファシズムのプロパガンダには役立たないものとみなされていた。ところが一方で、のちにツールにバルタリなどが出場した際には、ムッソリーニから「絶対勝て」という至上命令が下りたりして、要はトップのきまぐれによって都合のいい時だけ利用され、そうでない時はかえりみられないという、自転車競技にとってはなんとも不運な時代であった。バルタリの活躍した時期(1930年代後半以降)にはファシストの権威も徐々に落ちていったこともあり、バルタリがユダヤ人の亡命を助けたりした、こういった戦時中の反ファシズム的活動は戦後になって大いにたたえられるようになった。本誌245号(2011年4月)で紹介したようなバルタリのそういった活動は、そのような背景もあり、後々までひろく語られることとなった。

一方で、まだそこまで時代が下る前、むしろファシズムが上り調子の時代に反ファシズムを標榜し

ていたことは、時代の流れとはいえ、ポットッキアにとって不幸なことであった。

●謎の最期

1927年6月3日、冒頭で述べたように、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリア州の農道で、頭がい骨骨折で意識を失ったポットッキアが発見された。病院に運ばれたものの、二度と意識を取り戻すことなく、12日後の6月14日、32年の短い生涯を閉じた。

死因については諸説あり、ファシストによる暗殺説、畑のブドウを勝手に取ろうとしていたポットッキアに農夫が石を投げつけて当たりどころが悪かったという過失事故説、家族が多額の保険金をかけていたという謀殺説…



【オッタヴィオ・ポットッキアの肖像】

いつも汚れたジャージを着ていたポットッキア。

そのとんがって広がった耳から、「チョウチョ」とフランス人たちに揶揄されたポットッキア。

フランスチームに所属していながら、しゃべれるフランス語といえば「バナナいらぬ、コーヒータくさん、ありがと」くらいだったポットッキア。

不遜ながら、どこか悲しげな眼をしたポットッキア。

時代に冷遇された彼について、残された記録は、その実力・実績からすればきわめて少ない。生命だけでなく、歴史的にも「消された」感がある。そんなポットッキアになぜか惹かれ、もっと彼について調べてみたいと思うのだった。

[参考資料]

『L'Italia del Giro d'Italia』(Daniele Marchesini, il Mulino, 2009)

『Campagnolo -The gear that changed the story of cycling-』(Paolo Facchinetti, Guido P. Rubino, 仲沢隆訳, 榎出版社, 2009)

『戦士の革命・生産者の国家』(ファシズム研究会編, 太陽出版, 1985)

『光の帝国・迷宮の革命』(伊藤公雄, 青弓社, 1993)

『ファシズムと文化』(田之倉稔, 山川出版社, 2004)

『永遠のファシズム』(Umberto Eco, 和田忠彦訳, 岩波書店, 1998)

『現代思想 -スポーツの人類学-』(青土社, 1986)

Wikipedia 関連情報

(当館スタッフ)

… 会館 だ よ り …

イタリア語 in ヴァカンス

秋の連休に、京都で楽しみながらイタリア語を学んでみませんか？

講師：当館イタリア語講師

日時：9月14日(金)～17日(月)

10:00～16:30(最終日は14:00終了)

参加費：30,000円(教材費・税込)

会場：日本イタリア京都会館 本校



編集・発行 / (財) 日本イタリア京都会館

〒606-8302 京都市左京区吉田牛の宮町4

TEL: (075) 761-4356 / FAX: (075) 761-4357

E-mail: centro@italiakaikan.jp

URL: <http://italiakaikan.jp>